

大学教育にゆるやかに関連する地域催事の企画及びその継続的実践の意義

： 稚内北星学園大学 WCF を事例とした考察

黒木宏一・吉岡大輔・田端かがり・山岸純樹・伊藤良平

● 要約

本稿は、2015年12月に稚内中央商店街振興組合と稚内北星学園大学が主催したブラコンで優秀賞を受賞し、16年2月にWCF2016を実施した学生団体「わっかないコーヒーフェスティバル実行委員会（WCF実行委）」の2015年度、2016年度及び2017年度（見直しを含む）の活動について報告するとともに、まちづくりや大学における正課および正課外活動の視点でWCF実行委の活動の意義を整理する。特に、宗谷地域の歴史を再認識するとともにその歴史が活用され始めたこと、地域主体の関係性の広がりや深化がみられること、教育活動（Project-Based Learning）としての定着の可能性が見いだされたことについて言及する。

● キーワード

わっかないコーヒーフェスティバル

関係性

まちづくり

地域の歴史

コーヒー文化

1. はじめに

昨今、大学教育においてもアクティブ・ラーニングが取り入れられており、プロジェクト型教育（PBL：Project-Based Learning、以下「PBL」と表記する。）についての論文は、近年その数が多くなっている注1。

そのような中で、稚内北星学園大学においても、平成26年度「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備事業」（以下、「COC事業」という。）の採択を受け、自治体等と連携を図り事業を展開しており、これを背景として地域志向教育及び研究の推進と同時に、「街を教室に」というキャッチコピーでアクティブ・ラーニングの推進が図られている。黒木（2016）は、COC事業を背景として生まれた稚内北星学園大学と地域との連携を通じて実践するPBLの事例として、「第1回稚内中央商店街イベントプランコンテスト（プラコン）」と「わからないコーヒーフェスティバル2016（WCF2016）」の取り組みを紹介し、その可能性と課題について考察した。

本稿は、2015年12月に稚内中央商店街振興組合と稚内北星学園大学が主催したプラコンで優秀賞を受賞し、16年2月にWCF2016を実施した学生団体「わからないコーヒーフェスティバル実行委員会（WCF実行委）」の2015年度、2016年度及び2017年度（見直しを含む）の活動について報告するとともに、まちづくりや大学における教育活動の視点でWCF実行委の活動の意義を整理する。特に、宗谷地域の歴史を再認識するとともにその歴史が活用され始めたこと、地域主体の関係性の広がりや深化がみられること、PBLとしての定着の可能性が見いだされたことについて言及する。

以下、第2節はWCF実行委の設立からWCF2016を行った第1期（2015年度）の活動について、第3節は第2期（2016年度）の活動について、第4節で第3期（2017年度）の活動についてそれぞれ整理し、第5節において活動の意義を議論する。

2. WCF 実行委の設立から第1期の活動（2015年度）

2.1 大学COC事業と商店街との連携

稚内北星学園大学では、平成26（2014）年に採択されたCOC事業（文科省地（知）の拠点推進事業）の一環として、連携自治体や地元商工会議所、観光協会などが一堂に会して意見交換する「COC推進連絡会議」を年に1回開催している。その第1回会議（2015年3月）において、稚内中央商店街振興組合（振興組合）から商店街における学生活動に対し単年度資金を拠出する申し出を受けた。これを受けて、大学に設置のCOC推進委員会地域観光支援、まちなか振興支援、学生COC支援、事業推進の各室長と振興組合理事長からなる事務局を設置し、数回の意見交換を経て、学生を中心とするグループに参加資格を与え、優秀賞受賞団体に対して事業資金35万円を支給する、プラコンを図表1のとおり実施することとなった。

図表 1. プラコン実施の経過

月 日	内 容
2015年3月	COC推進連絡会議
2015年5月～8月	学内検討
2015年9月～10月	プラコン事務局会議
2015年11月	告知・説明会開催
2015年12月	応募〆切 1次審査（書類） 2次審査（プレゼン）
採択プランの決定	
2015年12月 ～2016年2月	採択プラン準備
2016年2月13日	採択プラン実施
2016年3月	報告書提出（終了）

注：筆者らが作成。

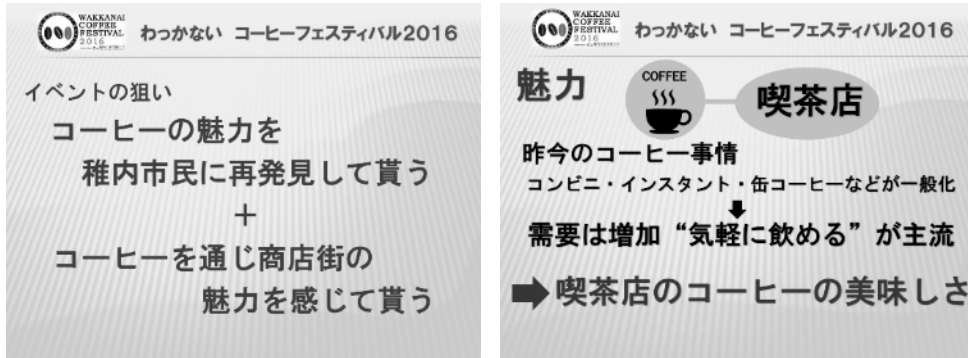
2.2 WCF 実行委の発足と WCF2016 の実施

プラコン応募団体である WCF 実行委は、優秀賞受賞とともに WCF2016 を実施（主管）するために発足した。WCF2016 は、「まちラボ」^{注2}の特設ブース（2016年2月13日）と参加店舗（20店舗）で2月13日～20日（8日間）に使用できるコーヒー券を発売し、多くの方々に稚内に歴史的な背景を持つコーヒーを通じてまちなかでのひと時を楽しんでいただくという企画であった。企画の骨子は図表2、稚内の持つ歴史的な背景と企画の関係は図表3のとおりである。なお、企画の一環として「コーヒー健康講座・焙煎体験」と、まちラボ特設ブース来場者の投票により稚内一のコーヒーを選ぶ「コーヒーグランプリ」も実施した。

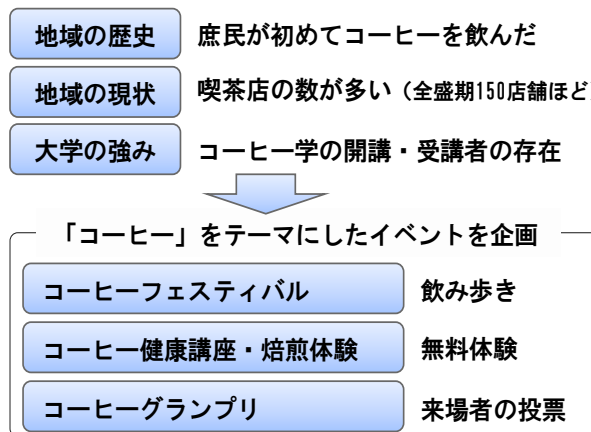
2.3 WCF2016 の成果

WCF2016 の成果は概ね以下の通りである。①商店街の賑わいの創出：特設ブースには350名を超えるお客様が来場した。②チケットの完売：300枚の目標に対して500枚のチケットが完売し、流通した。③参加店舗の売り上げへの貢献：新規顧客の来店、来店に伴うフードの注文があり、「売り上げに貢献した」（参加店舗アンケートの93.75%、有効回答数n=16、図表5）との回答を得た。④来場者の高い支持：来場者から「このようなイベントがあれば、次回も参加したい」（参加者アンケートの98.00%、n=50、図表6）との回答を得た。⑤メディアの理解：新聞等でも数多く（15記事）取り上げられた。

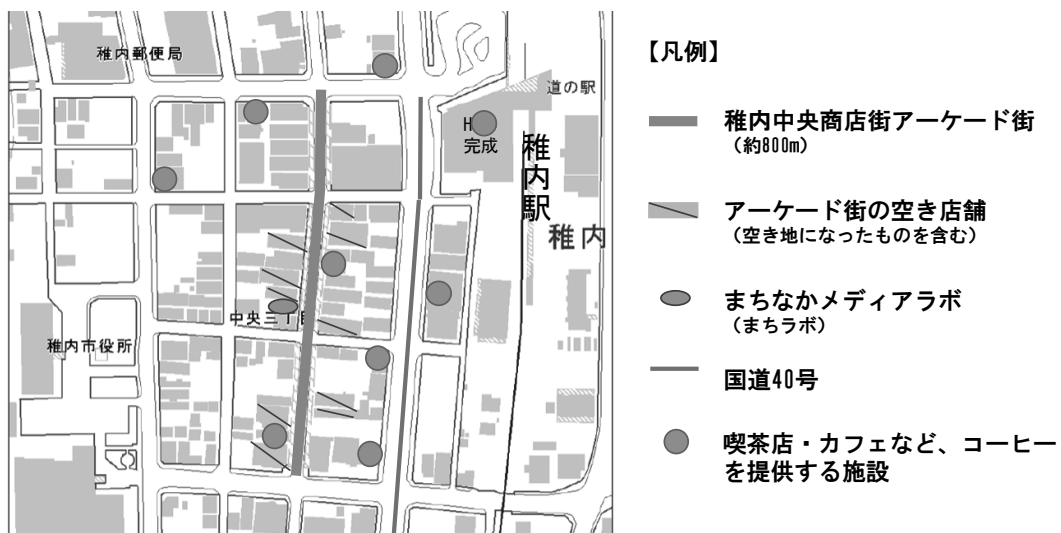
図表 2. WCF 企画の骨子



引用：プラコン2次審査資料、スライド5（左）及び7。(C)WCF2015。



図表 4. 稚内中央商店街周辺の喫茶店等



注：地図出典は国土地理院ウェブサイト (<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>) を加工して筆者らが作成。2017年2月12日現在の店舗状況を表示。

写真1. プラコン2次審査会(1)



注: 審査員5名(右上)ほか一般聴衆、企画提案者。
2015年12月23日撮影 (C)WCF。

写真2. プラコン2次審査会(2)



注: 商店街振興組合理事長(左)と優秀賞受賞プラン
提案者ら。2015年12月23日撮影 (C)WCF。



図表 5. WCF2016 参加店舗対象アンケートの結果

質問項目	はい	いいえ	回答者数(n)
1. 参加してよかったと思いますか	100.00%	0.00%	n=16
2. 売りにげに貢献したと思いますか	93.75%	6.25%	n=16
3. 契約単価は妥当だと思えましたか	81.25%	18.75%	n=16
4. また参加したいと思いますか	100.00%	0.00%	n=16

(自由記述)

■PRが足りない。SNSに頼らないで。 ■いろいろなコーヒーをまとめて試飲できるようにしてほしい。 ■お客様は3杯1,200円で購入し、店によって300円台もあるのでおかしいと言われた。 ■学生だからと甘く考えず、責任を持ってほしい(プロ意識) ■企画の意図(商店街より広げすぎたのでは) ■高校生、大学生は、この企画を喜ぶのではないか。 ■このようなイベントはありがたいので、頑張ってください。 ■このようなイベントを何回か続けてほしい。 ■今回いろんな人たちがお店に来て、店の雰囲気を知っていた。ありがとうございました。 ■今回強力な協力を中央商店街さんからいただいて実施したが、何年か後は各店で協力してできたらいいのではないか。 ■今回の結果をまとめて、参加店舗の集まりを開いてほしい。 ■参加店舗で券を売るようにしたら良いのでは。 ■時間をかけて企画を練って。 ■夏もやりましょう。 ■何度でもやってください。 ■南版、北版、市内全域などできたら、コーヒーの街としてよいのではないか。

注：WCF参加20店舗に対して精算実施時(2016年2月21日～22日)にアンケート調査票(無記名式)を配布。後日郵送により回収する方法で実施。16店舗より回答を得た。詳細は、WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会(2016)3-4頁に記載。

図表 6. WCF2016 ラボブース来場者アンケートの結果(一部項目抜粋)

質問項目	はい	いいえ	回答者数(n)
3. 宗谷とコーヒーのつながりをご存知でしたか	51.00%	49.10%	n=51
5. 今回、新たに気に入った喫茶店は見つかりましたか	76.70%	23.30%	n=43
6. 今後このようなイベントがあったら、また参加したいと思いますか	98.00%	2.00%	n=50
2. このイベントをどのように知りましたか(複数回答可)	新聞	17.60%	n=51
	ポスター	19.60%	
	口コミ	25.50%	
	インターネット	5.90%	
	Facebook	5.90%	
	その他	41.20%	

注：調査員がアンケート調査の説明ののち、協力の承諾があった来場者に対して調査票(無記名式)を配布し、その場で回収する方法で実施。1時間当たり10名程度の回収を想定、51名より回答を得た。詳細は、WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会(2016)4頁に記載。

3. 第2期の活動(2015年度)

3.1 すいかまつりへの協力

2016年10月、本学と研究事業で連携のあった稚内市教育委員会科学振興課(稚内市青少年科学館・稚内ノシャップ寒流水族館)から、科学や水族館への興味・関心をより高めることを目的として同館で例年

開催される「すいかまつり」(10月29~30日)において、WCF 実行委が事業内の1区画「稚内北星カフェ」を担当し、イベントに協力してほしいとの依頼を受けた。

WCF 実行委は、同課から無償供与を受けるポップコーンの無料配布を行うとともに、稚内ホテル旅館業組合より、同組合が開発し、2016年12月に稚内観光協会より販売予定のオーガニックブレンドコーヒー「朝Cafe 西海岸909」(909ブレンド)の提供を受けて、両日とも7名の体制で行った。

同カフェでは150名ほどがコーヒーやココアを注文し、909ブレンドが「美味しい」、「どこで販売するのか」「夏、やっていった朝カフェのコーヒーだね」など関心の声が聞かれた。「Facebookを見てきた」などの声もあり、一定の成果を収めた。

写真5. すいかまつり (1)



注: 出店準備の様子。2016年10月29日撮影(C)WCF。

写真6. すいかまつり (2)



注: 焙煎体験 (空冷) の様子。2016年10月29日撮影 (C)WCF。

3.2 WCF2017 の実施

WCF2017 は、まちラボに特設ブース (2017年2月11日) を開設し、市街地内の喫茶店等30店舗の参加 (対前年5割増し) を得て、2月4日~19日 (16日間) に使用できるコーヒー券を販売、WCF2017 を開催した。

WCF2017 の成果は概ね以下の通りである。①商店街の賑わいの創出: 2月11日のまちラボ特設ブース来場者は、550名を超えた。②チケットの追加販売: 当初予定500枚に対して上限に設定していた700枚も完売し、増刷を行い、結果として731枚が販売され、流通した。③参加店舗の売り上げへの貢献: 新規顧客の来店、来店に伴うフードの注文があったことが報告され「売り上げに貢献した」とのは95.45% (n=22, 図表7) に及んだ。④来場者の高い支持: 「このようなイベントがあれば、次回も参加したい」との回答が100.00% (n=68, 図表8) と来場者の高い支持を得た。⑤口コミによる来場者の増加: WCF2016の来場者アンケートでは「口コミ」でイベントを知ったとの回答が25.50% (n=51, 複数回答, 図表6) だったが、WCF2017では46.00% (n=66, 複数回答, 図表8) であった。⑥メディアの理解: 新聞等でも数多く (10記事) 取り上げられた。⑦商店街の買い物ポイント「タコカポイント」がたまるスタンプラリーを稚内中央商店街の16店舗の協力により実施した。

写真7. WCF2017 (1)



注：まちラボ特設会場（オープニングセレモニー前）の様子。2016年2月13日撮影（C）WCF。

写真8. WCF2017 (2)



注：焙煎体験（ピッキング）の様子。WCFの学生（右）と参加者。2016年2月13日撮影（C）WCF。

図表7. WCF2017 参加店舗対象アンケートの結果

質問項目	はい	いいえ	回答者数(n)
1. 参加してよかったですか	100.00%	0.00%	n=21
2. 売りにげに貢献したと思いますか	95.45%	4.55%	n=22
3. 契約単価は妥当だと思いましたか	86.36%	13.64%	n=22
4. また参加したいと思いますか	100.00%	0.00%	n=20

（自由記述）

■お客様のチケットの買いづらさ。車のない人は買いづらいといわれました。大変なイベントの企画、実行お疲れ様でした。今後も学生の視点での楽しい企画をおねがいします。■お客さんのメリットがないようです。■今回は長い期間の利用だったのでこれからも毎年続けてほしいと思います。店主さん達の意見を聞いて長く続けていくように話し合いも必要でないでしょうか。■学生活動の一貫教育になればよいと思います。街も期間中は潤い、活性化につながると思います。■四季毎に継続してもらいたい！■大学からのコーヒーと稚内のかかわりを伝えるコーヒーの楽しみ方を市民に伝える（その前に勉強を！）アーケード商店街でのイベントの展開の仕方を検討が必要である。もっと喫茶店に活力を！イベントを通じて各店にチャームポイントを！■チケットの売り場を開拓してください。■氷雪の広場との日程が重なっていてよかった。使用期限が伸びたことにより売上増しにつながった。来年も継続して実施していただきたい！■イベントをやっていることを知らない人が多い。■稚内コーヒーフェスティバルの各店によりコーヒーの味が違う事、落ちついてコーヒーが飲める雰囲気を感じてほしいです。

注：WCF参加30店舗に対して精算実施時（2017年2月21日～22日）にアンケート調査票（無記名式）を配布。後日郵送により回収する方法で実施。22店舗より回答を得た。詳細は、WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会（2017）2-4頁に記載。自由記述の一部について回答者を特定しないため秘匿処理した。

図表 8. WCF2017 まちラボブース来場者アンケートの結果（一部項目抜粋）

質問項目	はい	いいえ	回答者数(n)
3. 昨年の稚内コーヒーフェスティバル2016に参加しましたか	39.10%	60.90%	n=69
5. 今回、新たに気に入った喫茶店は見つかりましたか	62.70%	37.30%	n=59
6. 今後このようなイベントがあったら、また参加したいと思いますか	100.00%	0.00%	n=59
2. このイベントをどのように知りましたか（複数回答可）	新聞	7.60%	n=66
	込チラシ	7.60%	
	ポスター	12.00%	
	口コミ	46.00%	
	インターネット	11.00%	
	Facebook	20.00%	
	その他	20.00%	

注：調査員がアンケート調査の説明ののち、協力の承諾があった来場者に対して調査票（無記名式）を配布し、その場で回収する方法で実施。1時間当たり10名程度の回収を想定、66名より回答を得た。詳細は、WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会（2017）4-5頁に記載。

4. 第3期の活動（2017年度）

4.1 「わっかない白夜映画祭」への協力

稚内でのコーヒー文化の発信・定着を理念として掲げている WCF 実行委として、年に1度の WCF のみではその活動は十分ではない。そこで第3期は最北端ならではの祭典「日本最北端わっかない白夜祭」の映画部門「わっかない白夜映画祭」（2017年6月17日午前9時～18日午後9時、夜通し10作品を上映）で、深夜のみ（17日午後10時半～18日午前6時（完売）^{注3}）のコーヒー提供を行った。学生4名教員1名の体制でシフト制とし、課外の学生活動とした。また、深夜のブース開設としたのは、映画館の飲食等施設の通常営業に配慮し、これらの閉店後の営業としたためである。

上映映画のラインナップから WCF オリジナルブレンドのドリップコーヒーと、稚内にゆかりのある成田専蔵珈琲店（青森県弘前市）のオリジナルブレンド「藩士の珈琲」を販売した。例年20名ほどの深夜帯の来場者数から、同程度の売り上げを見込んでいたが、結果として46杯販売され、お客様から「美味しい」との声があり、好評であった。

写真9. 白夜映画祭



注：出店の様子。2016年6月17日撮影 (C)WCF。

4.2 正課への組み込みによる課題の解決へ：「地域学特講（企画実践）」（仮称）の開設^{注4}

WCF 実行委は、プラコン優秀賞受賞によりスタートしたが、宗谷、とりわけ稚内とコーヒーとに密接な関係があることを視点を、コーヒー文化の発信と定着というコンセプトを掲げ活動してきた。これまでの2期にわたる活動を通じて珈琲文化を伝える集団（団体）として地域に認知されており、イベントの継続と組織の発展のもと、さらに地域の活動へのコミットが求められている。そのため具体的には、①メンバーの持続的な代謝や活動の質を担保する、②地域の事業所や店舗、住民とのつながりを一層深める、③地域からの連携依頼に対応するなどの力（組織的な対応力）を、WCF 実行委が持つことが必要である。

そこで、稚内北星学園大学は、「日本で最初に庶民がコーヒーを口にしたとされる稚内において、コーヒーにまつわる歴史・文化・化学的特性を学びつつ、地域住民や地元商店街との関わり、企画自体の会計処理、チケットやポスターのデザイン、SNS等による広報活動をわっかないコーヒーフェスティバルという企画の実践を通じ学んでいくことにより、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」という社会人基礎力を養成する」^{注5}ことを学習教育の目標とした新規開講科目「地域学特講（企画実践）」（仮称）を、図表9（a）の内容で2017年度後期から開講する予定としている。これにより、WCF の活動、特にわっかないコーヒーフェスティバルを題材として、学生は個々の専攻する学問分野を踏まえつつ、図表9（b）のチームの業務に取り組むことを通じて、能動的な学びを受けることができる。

これまでの2年、大学の教員が責任者として学生団体（WCF 実行委）の役員に加わり、「課外活動」として企画を実践してきたが、営業や広報、会計管理などを「正課」（新規開講科目「地域学特講（企画実践）」（仮称））に組み込み、能動的な学習を効果的かつ継続的に行う計画の段階に至っている。

図表 9 (a). 「地域学特講 (企画実践)」 (仮称) 授業計画案

回	実施月	内 容
1	9月	イントロダクション ・コーヒーとコーヒーフェスティバルを知ろう
2	9月	コーヒーと稚内、コーヒーフェスティバルの業務 (詳細)
3	9月	チーム編成と計画の策定
4	10月	各チームで業務を実行 ※ 4～12回の講義は進捗状況の報告、分担業務の実施、 予算折衝など全体やチームでのディスカッションを 行う。また、他のチームの業務についても積極的な 関与を求める。
5	10月	
6	10月	
7	11月	
8	11月	
9	11月	
10	12月	
11	12月	
12	12月	
13	1～2月	イベント前準備
14	1～2月	前日準備 ※イベント当日は講義としない
15	1～2月	後日片づけ
16	1～2月	事後処理 (礼状送付、店舗清算、アンケート集計等)

注：シラバスの原稿をもとに筆者らが作成。

図表 9 (b). 「地域学特講 (企画実践)」 (仮称) チーム毎の業務案

チーム	業務内容
デザイン 営業	<ul style="list-style-type: none"> ・チケット、ポスター、マップ、チラシ等を制作 ・喫茶店、協賛企業 (団体・個人等を含む) 営業 ・営業用文書資料の作成 ・営業の実施
渉外	<ul style="list-style-type: none"> ・稚内中央商店街、マスコミ、保健所、消防署、市役所、道宗谷総合振興局、保険会社等対応
企画	<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画の取りまとめ、計画の管理 ・事業報告の作成 ・WCFブース担当
経理	<ul style="list-style-type: none"> ・予算管理、金銭出納、決算処理、決算報告の作成

注：シラバスの原稿をもとに筆者らが作成。

5. 考察

5.1 活動の意義

5.1.1 地域の活動主体の関係性の広がりとおひーフェスティバルの発展

敷田は、効果的なまちづくりということについて「活動 (事業) が対象とする範囲の広がり」に気を付けなければ、できもしないことを手掛けてしまい失敗する」(敷田 2013、23 頁) と述べ、図表 10 のように表している。

2 回のフェスティバルの参加店舗からは、「このようなイベントを何回か続けてほしい」「南版、北版、市内全域などできたら、おひーの街としてよいのではないか。」(以上、WCF2016 参加店舗アンケート調査自由回答) や、「今回は長い期間の利用だったのでこれからも毎年続けてほしいと思います。」「使用期限が伸びたことにより売上増しにつながった。」(以上、WCF2017 参加店舗アンケート調査自由回答) といっ

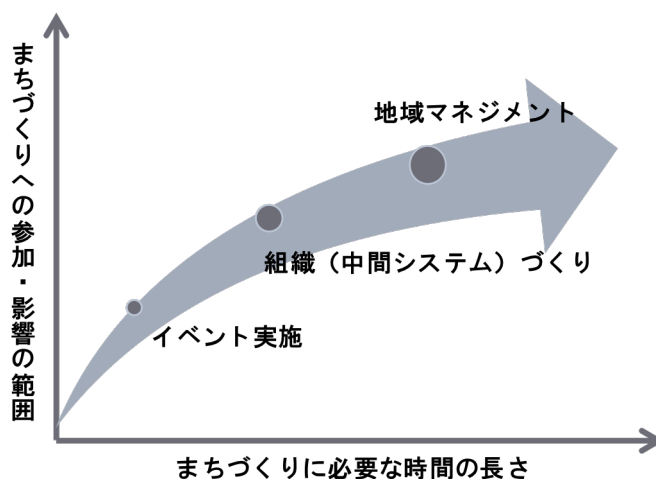
た声が聞かれ、継続を前提とした課題の指摘が出されている。加えて、「今回は強力な協力を中央商店街さんからいただいて実施したが、何年か後は各店で協力してできたらいいのではないか。」「今回の結果をまとめて、参加店舗の集まりを開いてほしい。」(以上、WCF2016 参加店舗アンケート調査自由回答) という声も聞かれた。WCF 実行委は、このような指摘を分析し、解決策を検討するとともに、次のフェスティバルで改善を図ることとしている。

図表 11 は、WCF2016 と WCF2017 の参加店舗数 (WCF 実行委を除く)、チケット発券枚数 (販売及び協賛御礼としての発券)、および協賛口数の比較である。参加店舗数は 20 店舗から 30 店舗に、チケット発券枚数は 500 枚から 735 枚に、協賛口数は 38 口から 45 口にそれぞれ増加した。

WCF 実行委のこれまでの活動は、学生の発想に端を発し、WCF2016 を成功させることに焦点を当てた第 1 期、地域からの声掛けによって小さいながらも連携活動を行い、1 回目よりも一層地域に定着し、規模を拡大した 2 回目の WCF2017 の開催を行った第 2 期、そして、わからない白夜映画祭実行委との協力などその活動の幅を広げている第 3 期と、地域の様々な活動主体との関係性も深まっている。WCF 実行委は「できること」を着実に実施するとともに、経験の蓄積を背景として「できること」の幅を緩やかに広げている。その中で他の主体との関係を時間をかけて醸成しており、今後もこの関係性の広がりとともに「わからないコーヒーフェスティバル」というイベントの主権を中心として、「まちづくり」へのかかわりを深めていくことが期待される。

なお、稚内市では「まちづくり」の課題として、中心市街地活性化 (商店街の空洞化の問題など) がある^{注6}。3.2 節で述べたように、WCF2017 では共催の振興組合の事業に少しでも貢献できることはないかと、商店街の買い物ポイント「タコカポイント」がたまるスタンプラリーを稚内中央商店街の 16 店舗の協力により実施した。このように、WCF は、空洞化する商店街の活性化という課題について、行動を伴う思考の場としても役割を果たすことができるものと考えられる。

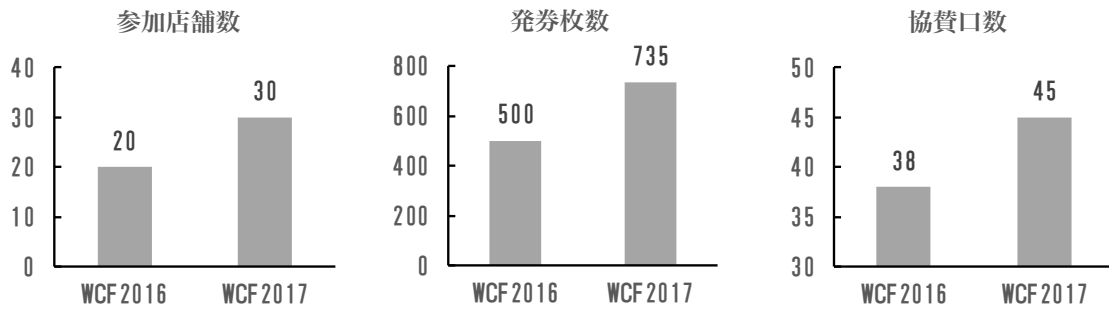
図 10. まちづくりのスケール



引用: 敷田 (2013) 図 1-3、23 頁。

注: 説明のため筆者らが一部修正した。

図表 11. 参加店舗数、発券枚数および協賛口数の実績



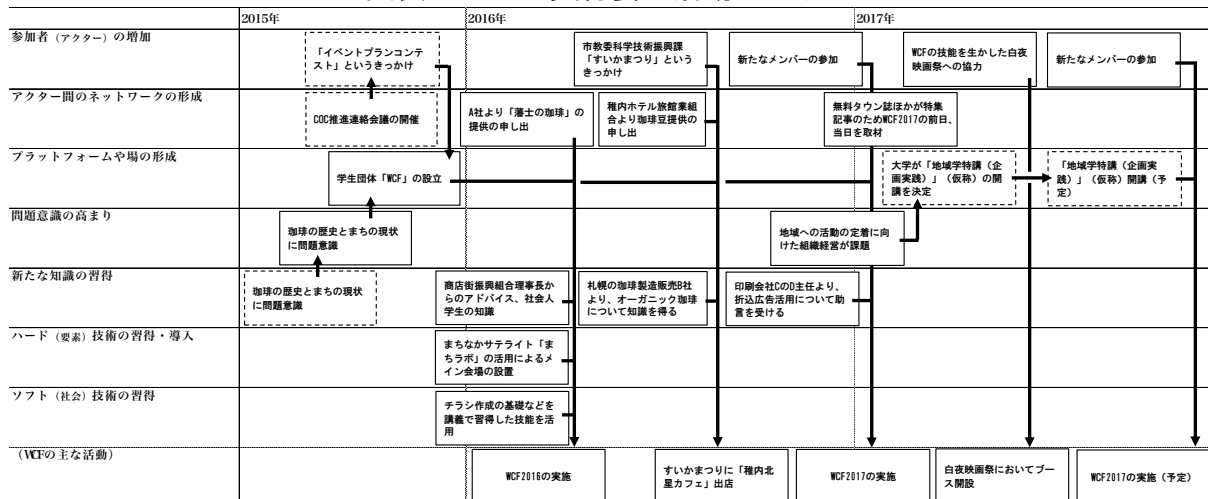
注：発券枚数の内訳は次の通り。WCF2016：販売 348 枚、協賛御礼 152 枚。WCF2017：販売 645 枚、協賛御礼 90 枚。

5.1.2 地域の活動主体の関係性の広がり と WCF 実行委の活動の深化

敷田は、まちづくりの重要ステップとして「参加者（アクター）の増加」「アクター間のネットワークの形成」「プラットフォームや場の形成」「問題意識の高まり」「新たな知識の習得」「ハード（要素）技術の習得・導入」「ソフト（社会）技術の習得」（敷田 2013、29 頁）があり、それが繰り返されることでまちづくりが進むと述べている。

図表 12 は、上記のステップごとに WCF 実行委の活動を示したものである。まず、COC 事業における推進連絡会議においてプラコンが実施され、コーヒーの歴史やまちの現状に問題意識を持ちプラコンに応募するため設立された学生団体が、新たな知識の習得を経て WCF2016 を実施したことが示されている。その後、新たなアクターの参加を経て「コーヒーの歴史やまちの現状」へかかわり続けていることがわかる。WCF 実行委は、「コーヒーの歴史やまちの現状」の改善、コーヒー文化の再認識のための取り組みを担う組織として育っていると考えられる。

図表 12. WCF 実行委の活動ステップ



注：筆者らが作成。

5.1.3 コーヒーのまちづくりの主体としての WCF 実行委

WCF 実行委は、前 2 節で述べた通り、コーヒー文化によるまちづくり「コーヒーのまちづくり」を

推進するプラットフォームとなっている。本節では、WCF 実行委の組織経営の側面について整理したい。

組織経営の面においては、主な収入源をわっかないコーヒーフェスティバルの開催に頼っている。その収支は図表 13(a)及び図表 13(b)の通りである。収入の面においては、稚内中央商店街振興組合からの2期にわたる助成を得たが、これは事業開始直後の運転資金として消耗品の購入等に充てられ、決算においてはチケット収入、協賛金収入において費用を賄う構造が定着しつつある。フェスティバルの収支差額（黒字）は次期に繰り越しており、フェスティバルの運転資金を確保するに至っている。また、WCF 実行委の会計は、内部（監事監査）、外部（大学による監査）監査を実施している。

このように、WCF 実行委はまちづくりにかかわる主体として、財務を含めて組織経営の基礎が構築されつつある。

図表 13(a). WCF2016 の決算概要

	予算	決算
収入の部	730,000	984,450
(主な内訳) 商店街より補助		350,000
チケット収入		417,600
協賛金収入		190,000
支出の部	586,905	587,735
(主な内訳) 人件費		178,000
参加店舗支払い		223,800
印刷・宣伝費		27,000
収支差額 次期繰り越し	143,095	396,715

注：予算書及び決算書より筆者らが作成。単位は円。

図表 13(b). WCF2017 の決算概要

	予算	決算
収入の部	1,000,000	1,245,780
(主な内訳) 商店街より補助		200,000
チケット収入		774,000
協賛金収入		225,000
支出の部	1,086,660	913,310
(主な内訳) 人件費		172,000
参加店舗支払い		332,470
印刷・宣伝費		236,088
収支差額 次期繰り越し	▲ 86,660	332,470

注：予算書及び決算書より筆者らが作成。単位は円。

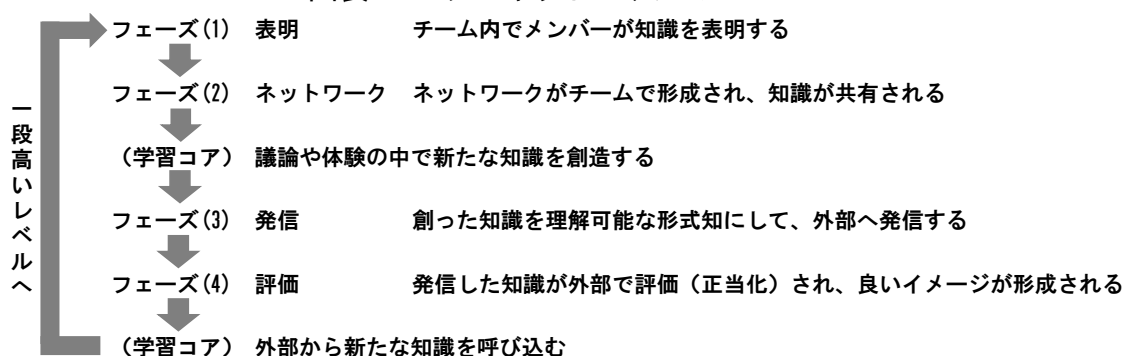
5.2 大学の主体的なかかわりの意義：教育活動として

5.1 節では、WCF 実行委の活動について、その意義を考察した。5.2 節では、大学がまちづくりに主体的にかかわることの意義について考察したい。特に、WCF 実行委の活動について、教育活動としての意義を確認する。

さて近年、社会人基礎力の涵養という社会からの要請に応じるべく、アクティブ・ラーニングの導入が全国の大学においてみられる。ここでは、いわゆる能動的な学習をどのようにデザインすべきか、

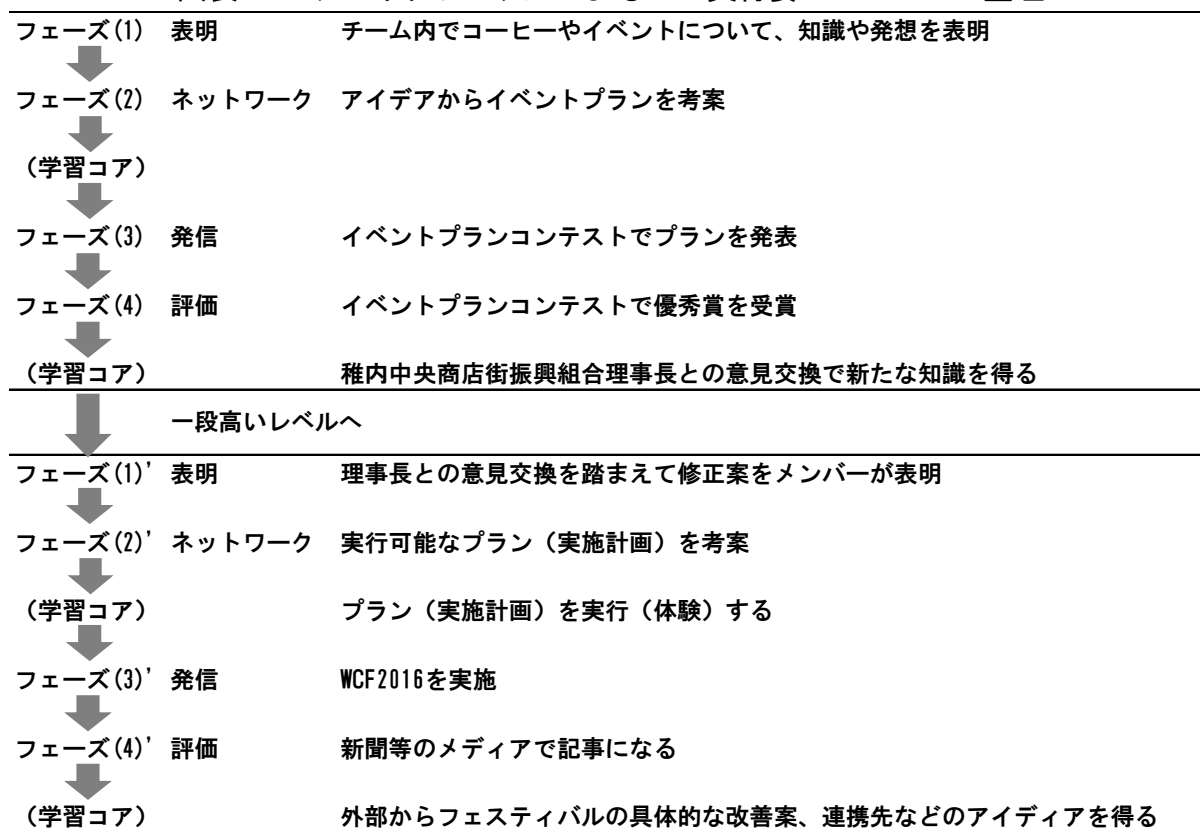
という点について考える。敷田（2005）は、工学における創成教育の学習モデルとして、「サーキットモデル」の適用を示した。サーキットモデルは、2002年2月に敷田麻実氏が発案し、その後、敷田氏が末永聡氏・森重昌之氏・平澤光氏らとの共同研究の中でより洗練させたオープンソース型のプロセスモデルである^{注7}。モデルは、図表14のように「表明」^{注8}「ネットワークの形成」「成果の発信」「評価の形成」という4つのフェーズと「学習コア」から構成される。以下、サーキットモデルのプロセスに当てはめて、WCF実行委の教育活動としての意義を確認する。

図表14 サーマットモデルのプロセス



注：敷田（2005）をもとに、筆者らが作成。敷田（2005）は、「グループ」、「知識を発信する」（フェーズ（1））という文言をそれぞれ用いているが、本稿では「チーム」「知識を表明する」を用いた。

図表15 サーマットモデルによるWCF実行委のプロセスの整理



注：筆者らが作成。イベントプランコンテストからWCF2016の開催までを整理した。2段階目の各フェーズには、説明の便宜上「'」を付した。

図表 15 に整理したように、フェーズ (1) では、地域学特講 (コーヒー学) を受講しコーヒーインストラクター 2 級を取得した学生や、社会人学生などプランに共感した参加者 (学習者) が集まり、個々の知識を表明する状態である。このようなチーム内の議論を通じてネットワークが形成されると、知識やアイデアが共有される。これがフェーズ (2) の状態である。このようにして議論の場で知識が共有されることで、知識の組み合わせによって新たな知識 (アイデア) が創造される (学習コア)。ここで生み出された新たな知識は、外部の者に理解可能な形へ加工される。WCF 実行委の初期では、プラコンがその機会となり、発表のために作成された事業計画書やプレゼンテーション資料という形で知識の発信が行われた。これが、フェーズ (3) である。そして、審査委員会の審査により優秀賞を受賞する (評価が与えられる) (フェーズ (4)) と、受賞者との実施に向けた打ち合わせを行い意見交換する (評価者がこのプロジェクトに賛同して参加する) ことで、新たな知識を得ることにつながっている (学習コア)。そして、一つ高次のフェーズ (1) に移行し、次のプロセスへ入ることとなる。

以上のように、WCF 実行委の活動は、チーム内での「知識の創造」とその発信による「新たな知識の習得」の循環という学習プロセスが設計されており、アクティブ・ラーニングの「場」として意義を有しているものと考えられる。

6. おわりに

6.1 まとめ

本稿は、WCF 実行委の 2015 年度、2016 年度及び 2017 年度の活動の系譜をまとめたうえで、その意義と可能性を検討した。その結果として、以下の 4 点を指摘した。

- ① 地域の様々な活動主体とのゆるやかな関係性の広がりが見られる。イベントの主催を中心として様々な「まちづくり」へのかかわりを深めることが期待できる。
- ② コーヒーの歴史やまちの現状の改善、コーヒー文化の再認識のための取り組みを担う組織となる。
- ③ 財務を含めた組織経営の基礎が構築されつつある。
- ④ WCF 実行委の活動は、アクティブ・ラーニングの「場」としての意義を有している。

6.2 今後の課題

本稿の事例では、プラコンが稚内北星学園大学と稚内中央商店街振興組合の共催で行われ、大学が最終的な責任を負うとの考えから、WCF 実行委の活動にも「責任教員」として専任講師が参加した。責任教員は、必ずしも「まちづくり」の専門家ではない。しかし、大学の果たすべき役割の一つとして地域貢献があり、また、アクティブ・ラーニングが推奨されている今日、必ずしも専門分野ではない教員がアクティブ・ラーニングに携わり、地域貢献活動を行うということもまた求められているといえよう。しかし、地域貢献活動の位置づけについては研究者によって「温度差」があるように思われる。本稿では WCF 実行委の活動とその教育活動としての意義について考察したが、大学教員の専門性や研究活動としての意義についても今後検討を行いたい。

● 付記

本稿の内容は、執筆の過程で日本計画行政学会第40回全国大会（セッションD-3、第2報告）において、「大学が手掛ける地域催事の意義と可能性：WCFを事例として」と題して口頭発表した。セッションの二名の座長及びフロアから大変有意義な指摘を頂いた。記して謝意を表す。なお、一部の指摘については、さらに今後研究を重ねて、別稿において議論したい。

また、本稿をまとめるにあたり、活動をともにするWCF実行委のメンバー諸氏に謝意を表す。なお、筆者らを除くWCF実行委のメンバー（WCF2017実施時点）は次の通りである。越後武蔵、梶浦里沙、勝又万由子、齊藤美彩、武田大貴、中島拓人、中田瑞稀、能代谷一輝、樋口明日佳、本田楓芽及び三石美保の各氏（五十音順）。

● 注

- (1) 黒木・高・佐賀（2017）148-149頁に先行研究を紹介した。
- (2) まちラボとは、COC事業の一環で稚内中央商店街アーケード街の空き店舗に稚内北星学園大学が設置したまちなかサテライトで、「稚内北星学園大学まちなかメディアラボ」で、通称「まちラボ」のことをいう。
- (3) 本稿の内容は、執筆の過程で日本計画行政学会第40回全国大会（セッションD-3、第2報告）において口頭発表した。その際執筆した黒木宏一・吉岡大輔・田端かがりほか（2017）の当該事例の報告部分に誤りがあったので、以下のよう訂正する。
（誤）第4節第1段落4行目「18日午後10時半～19日午前6時（完売）」
（正）「17日午後10時半～18日午前6時（完売）」
- (4) 本節は、2017年9月9日時点で執筆した。その後の経過及び結果、考察については、別稿に譲ることとしたい。
- (5) シラバス（案）より、筆者らが一部説明を捕捉するため加筆して引用した。
- (6) 例えば、稚内市（2015、40頁）。
- (7) 参考URL[1]を引用した。詳しくは、参考URL[1]を参照されたい。
- (8) 敷田（2005）では、「店を開く」というフェーズの名称を用いている。

● 参考文献

- [1] 黒木宏一（2016）「地域志向PBLの可能性と課題：WCFの事例から」日本計画行政学会『第39回全国大会研究報告要旨集』177-180頁
- [2] 黒木宏一・高澍・佐賀孝博（2017）「地域課題の解決への大学の主体的な関与：稚内ノシヤップ寒流水族館多言語化PJTを事例として」『稚内北星学園大学紀要』第17号、147-169頁
- [3] 黒木宏一・吉岡大輔・田端かがりほか（2017）「大学が手掛ける地域催事の意義と可能性：WCFを事例として」日本計画行政学会『第40回全国大会研究報告要旨集』（頁番号なし、全4頁）
- [4] 敷田麻実（2005）「サーキットモデルによる創生教育の学習モデル」『工学教育』第53巻第1号、35-40頁
- [5] 敷田麻実・森重昌之（2006）「地域環境政策に専門家はどうかかわるかー地域自律型マネジメントとその実現を支援する専門家のかかわりー」『環境経済・政策学会年報』第11号、194-209頁。
- [6] 敷田麻実（2010a）「専門家の創造的な働き方としてのハーフシフトの提案～科学技術コミュニケーターとしての隣接領域での無償労働～」『科学技術コミュニケーション』第8号、27-38頁
- [7] 敷田麻実（2010b）「地域づくりにおける専門家にかんする研究「ゆるやかな専門性」と「有限責任の専門家」の提

- 案」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第11号、35-60頁
- [8] 敷田麻実 (2013) 「観光まちづくり総論」地域観光マネジメント人材育成セミナー実行委員会『平成25年度北の観光リーダー養成セミナー講義テキスト』第1章、全52頁
- [9] 稚内市 (2015) 「稚内市都市計画マスタープラン」全85頁 (<http://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00001700/00001756/dainihen.pdf>、2017年8月21日閲覧)
- [10] WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会 (2016) 「実施・精算報告書」全53頁 (非公開資料)
- [11] WCF 稚内コーヒーフェスティバル実行委員会 (2017) 「実施・精算報告書」全43頁 (非公開資料)

参考 URL

- [1] 敷田麻実 「地域創造のためのサーキットモデルのページ」 http://www.geocities.jp/yumebouken2000/circuit_model/ (2017年8月14日閲覧)

● 英文タイトル

The significance of the planning of university's education based regional event and its continuing practice : A case study of WCF in Wakkanai Hokusei Gakuen Univ.

● 英文要約

This study is examined the significance and possibility of WCF after summarizing the genealogy of the activity in 2015, 2016 and 2017 by the WCF executive committee. We indicated the following four points as a result.

- (1) A moderate relation's expanse by local various communities is accepted. And the deepen relation to various "area innovation" on the mainly event's sponsor will be acknowledged.
- (2) It can become an organization taking the recognition of the coffee's history, the city's present improvement and the coffee culture.
- (3) The basic of organization management including the finance is already being established.
- (4) The activity of the WCF executive committee has the significance as "the place" of the active learning.

キーワード

Wakkanai Coffee Festival (WCF)

area innovation

the local history

coffee culture